

# 函館学

2009

キャンパス・コンソーシアム函館  
合同公開講座

函館学2009

講義資料

平成21年10月10日(土)午後2:00~3:30

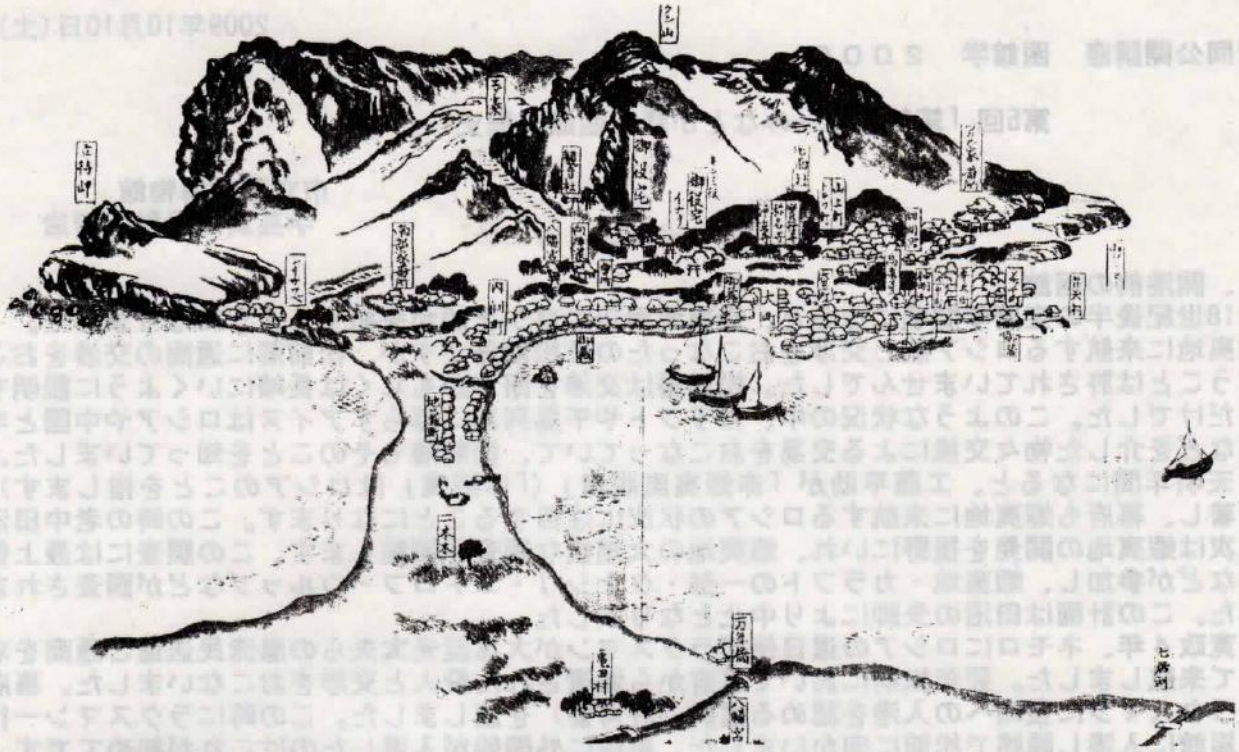
「箱館開港 - みなとが語る函館の歴史 -」

市立函館博物館学芸員 保科 智治

会場:ホテル法華クラブ

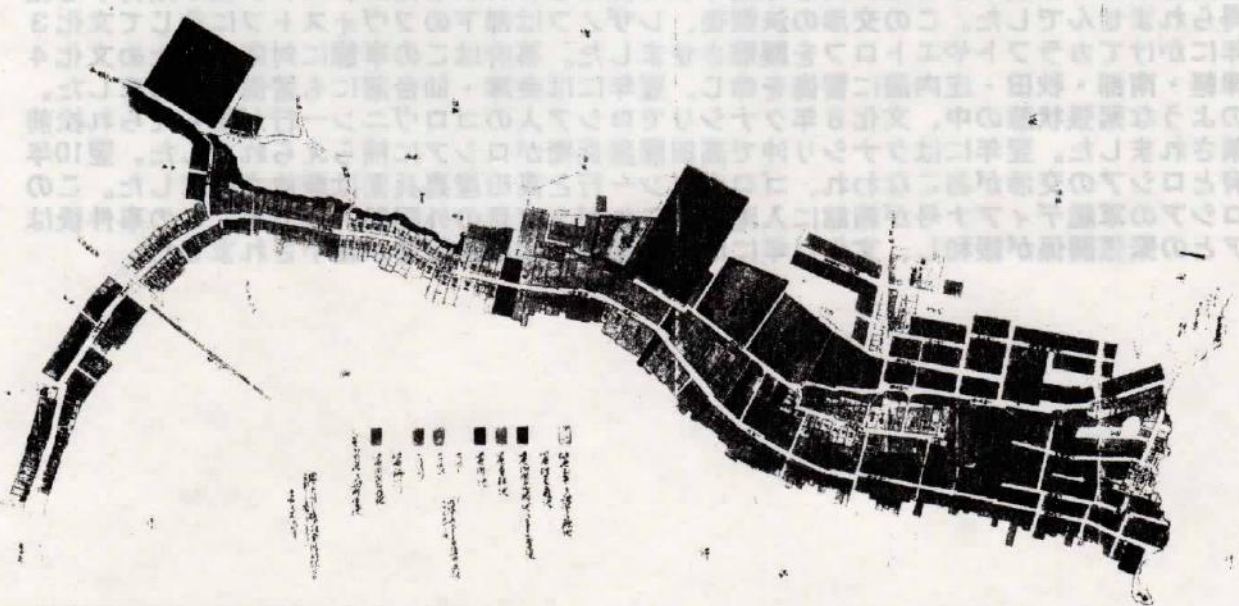
主催 キャンパス・コンソーシアム函館





松前箱館江差港地図一箱館（函館市中央図書館蔵）

蝦夷地の調査をおこなった秦檜丸が文化4年に描いた絵図です。築島が描かれていることなどから絵の内容時期は寛政～享和年間頃と思われます。文化4年に松前藩は転封され、全蝦夷地が幕府直轄となりました。箱館に在住していた奉行も松前に移りました。蝦夷地に来航あるいは出航する船はこの三港で改めを受ける必要がありました。幕府直轄期の箱館は港の整備も進み港としての地位を向上させました。



分間箱館全図（函館市中央図書館蔵）

享和元年に写された図で、函館の街中を詳細に描いた図としては最も古いものと思われます。左端の街並みが切れたところに「箱館入口杭」とあり、後に「櫛形」が設けられます。後に高田屋嘉兵衛が築く築島は描かれておらず、そこにつながる築堤のみが描かれています。



箱館市中細絵図（函館市中央図書館蔵）

文政四年松前藩が復領する直前の箱館の様子が分かる図で、「分間箱館全図」を基にしていると思われます。地番や建物なども詳細に記入されています。築島が完成し「高田屋金兵衛持」と記載されています。「樹形」も完成しています。



高田屋旧蔵 箱館絵図（函館市中央図書館蔵）

天保5年に完成したとされる箱館山の西国三十三観音の位置が番号で示されています。港には大町の辺りに沖の口役所が描かれ、築島での造船作業と思われる様子が見えます。

## 2、ペリー来航そして箱館開港

文化年間のロシアとの緊張関係が緩和した後、文政4年に松前藩は蝦夷地に復領しました。その後も蝦夷地近海では外国船の来航は頻繁にありました。

嘉永6年、アメリカのペリー艦隊が浦賀に来航し通商の要求をしました。翌安政元年再びペリー艦隊が来航し、日米和親条約が締結され下田は同年から、箱館は翌年からの開港が決定しました。同年ロシアとの間にも和親条約が締結されました。

ペリー艦隊が開港場となる箱館を視察するために来航した安政元年4月に、後に箱館奉行に任命される村垣範正・堀利熙の両名が蝦夷地調査のため津軽の三厩に到着していました。松前藩の要請を請け、後に五稜郭を設計する武田斐三郎らが箱館に向かいペリー一行との交渉に立ち会いました。ペリー艦隊が箱館を出航した後、村垣・堀の一行は蝦夷地およびカラフトの調査をおこない、江戸に帰った後幕府に蝦夷地の上知を上申します。

箱館開港に向けて、幕府は箱館奉行を再び任命しました。任命されたのは勘定吟味役竹内保徳でした。竹内はペリー一行との交渉役をおこなったり、品川台場の築造を担当した人物で、後に外国奉行としてヨーロッパ各国を回り条約に関する交渉をおこなっています。村垣も下田においてロシアのプチャーチン一行との交渉にあたり、品川台場築造にも携わり、外国奉行として咸臨丸に乗り込み遣米使節団の副使をつとめました。堀は各国との通商条約締結の際に幕府代表の一人として条約に調印し、外国奉行も勤め將軍の跡継ぎ問題にも関わる重要な位置にいた人物です。

村垣・堀の上申が受け入れられ、安政2年に松前藩領（東は木古内、西は乙部まで）を除く全蝦夷地を幕領としました。幕府は幕領となった蝦夷地の警備のため再び東北諸藩を動員しました。津軽藩と南部藩は箱館に、仙台藩はシラオイに、秋田藩はマシケに陣屋を構え警備を担当しました。松前藩も戸切地に新たな陣屋を構えました。

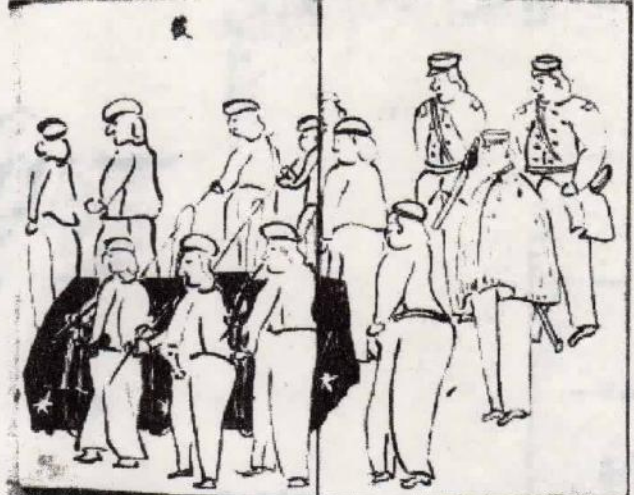
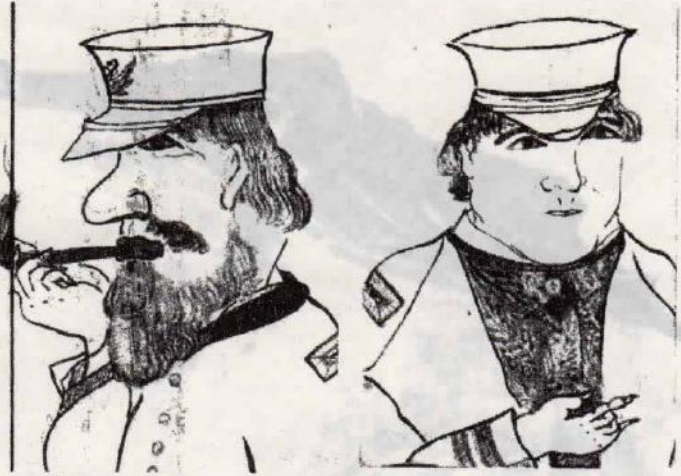
各藩が警備体制を整える中、箱館奉行は開港場箱館の警備を整えるため台場の整備と役所（奉行所）の移転計画を幕府に上申します。この結果、箱館港の入口にあたる弁天岬沖に台場を、亀田に役所を移転することになり、安政3年から工事に着手しました。

安政6年幕府は蝦夷地を津軽・南部・会津・仙台・秋田・庄内の各藩に領地として分与することにしました。こうすることによって各藩が自分の領地として開発し警備することを推し進める目的がありました。ロシアとの国境確定交渉で雑居地となったカラフトは、仙台・庄内・秋田・会津藩が二藩ずつ隔年で警備にあたることになりました。また蝦夷地の重要地点は幕領とし各藩に警備を担当させました。



墨利加船松前箱館湊江入津之図（函館市中央図書館蔵）

安政元年4月15日、3隻のアメリカ船が箱館港に入港し港内の測量をしました。続いて21日にペリーが乗船している蒸気船2隻が入港しました。この図はその時の様子を描いたものです。

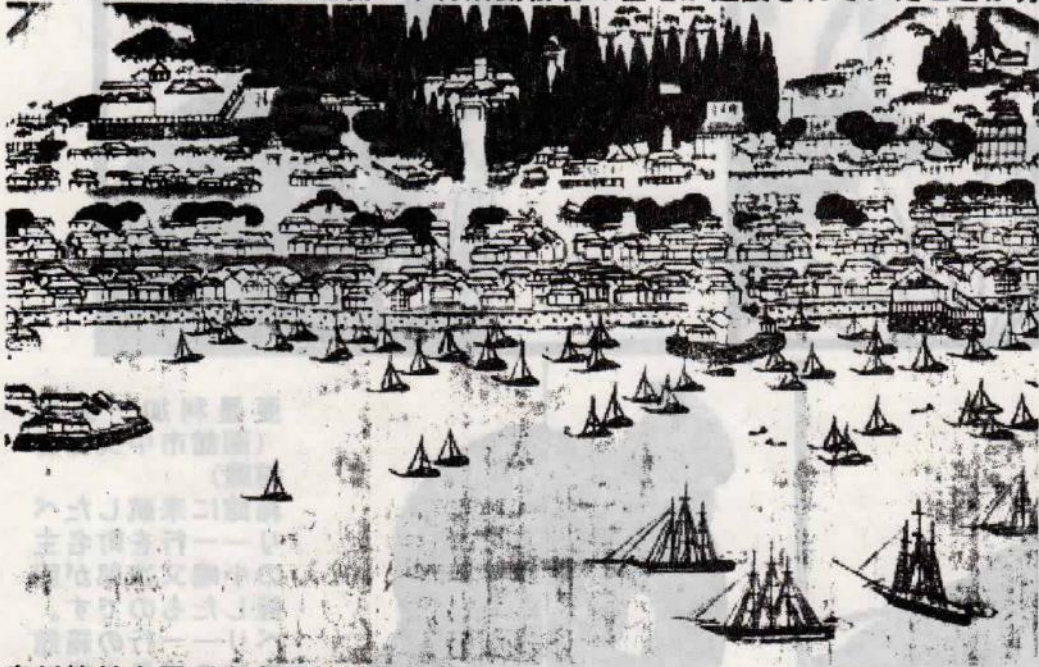


亜墨利加一条写  
 (函館市中央図書館蔵)  
 箱館に来航したペ  
 リー一行を町名主  
 の小嶋又次郎が記  
 録したものです。  
 ペリー一行の箱館  
 来航の様子を描い  
 た数少ない資料で  
 す。



箱館亀田一円切絵図（函館市中央図書館蔵）

箱館の街と五稜郭、弁天岬台場の位置関係がよく分かります。五稜郭が当時の街から遠く離れていたこと、五稜郭の北側に奉行所勤務者の住宅が建設されていたことが分かります。



奥州箱館之図（市立函館博物館蔵）

文久年間頃の箱館の様子が描かれています。和船・外国船が多数入港しています。山腹には植林で大きく育った杉木立が旧役所周辺を取り囲んでいることが分かります。

### 3. 開港場の様子

開港した箱館の街で、箱館の人は外国人をどのように見ていたかという、安政2年の夏に箱館を訪れた弘前の平尾魯僊は、その著「洋夷茗話」で次のように述べています。「今年安政二乙卯年夏六月下旬、松前箱館の海口に休帆する外国船は、北アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、の四ヶ国とぞ。(中略)此船々より三四十人又は五六十人つつ、都て二三百人許りも日々に上陸し、箱館市中及び亀田村箱館より一里、有川村箱館より三里の在々を往来して当地の人と肩を摺合ふと雖、なれて又回視するものなし」箱館の人にとってはすっかり外国人が歩いていることが当たり前となっていたような状況のようです。

街を歩く外国人の様子はといえば、「処々に憩みて煙草を吹き、湯水を乞ひ、市に欲しきものあれば何にても買取り、(中略)本邦の言葉も一点く覚えて、(中略)腰をりてお早うと云ふて床に腰かけ何か云ふて笑ひ、煙草吹つけ暫時有てサエナと云ふて帰れり。」(「洋夷茗話」といったように友好的な様子がうかがえます。問題もありました。酒を飲んで暴れたり、物を壊したりすることが度々あったようです。また、生活習慣の違いからおきる問題もありました。町中で鉄砲をうったり、犬を散歩させて町の人に迷惑をかけたり、雪道で馬そりをとばしたりするといったようなことで、当時の箱館ではそのような西洋式の習慣を迷惑に感じる人が多かったようです。

外国人が見た箱館はどのようにうつったのでしょうか。「函館港がもっとも賑やかなのは勿論五月から九月までの夏期である。この時期には町は絶えず大市のような活気を呈し、日中の狭い道路はほとんど通り抜けができない位である。道路の半分は乾魚で占められており、他の半分は近郊の産物一炭・薪・乾草・野菜・家畜その他を積んだ馬や牛の列が続いている。これに店で買物をする日本人や外国人の流れがたえず加わって雑踏を増している。」(秋月俊幸「ロシア人の見た開港初期の函館」(『地域史研究はこだて』第3号 1986・3))これは、ロシアの海軍大尉ナジモフが万延元年に書いた記録の一部です。この賑やかな箱館の様子を記録したナジモフとは反対に、同じロシア人の海軍軍医アルブレヒトは箱館のマイナスの面を記録しています。「函館が不潔な都市の部類に入ることは疑いがない。(中略)人々はどぶの中にあらゆる汚物を投げ込み、そこは常に腐敗しやすい物質で充満している。(中略)日本人は自分の家の中は非常に清潔に保っているが、住居の外のごみや汚物にはあまり注意を払わない。(中略)この町が伝染病の厄災から免れているのは、無数のからず(日本の唯一の医療警察)と空気のよどみを吹き飛ばす絶え間ない風のお陰である。」(同上)賑やかさの陰で街はかなり不衛生な状況であったようです。

箱館の人は、治療のためにロシア人の医師にも治療してもらっています。「実行寺止宿罷在候ヲロシアの医者相頼治療為致度奉存候」(「安政六未年願書并嘆願書」)初代領事ゴシケーヴィチに随行してきた医師アルブレヒトが実行寺境内において治療を行っていたようです。ロシアの病院については前述しましたが、領事館敷地内に建てられた病院について、ロシア人司祭ニコライ宅に寄寓していた同志社大学の創設者で箱館からアメリカに渡った新島襄がその著「函館紀行」で次のように記しています。「魯国立置きし病院は、医者診察所一ヶ所、病人部屋十二、魯の士官及びマトロス部屋各一ツ、内によき花園ありて、病人をして時々逍遙を為さしむ」「花園」に植えられていた花木については触れられていませんが、ロシアから持ち込んだものも植えられ、箱館の人の目に触れることもあったのでしょうか。

ロシア人が見た箱館と街の人との交流について、3人の報告を引用し紹介したいと思います。一人目は箱館に入港する軍艦に必要な情報を提供するために派遣された海軍大尉のナジモフの報告です。「ここには腕のよい日本人の大工や指物師(非常に明敏でのみこみの早い)もいる。日本人の鍛冶仕事はてきぱきしており」といった具合に、箱館の職人の仕事ぶりを評価しています。二人目は司祭付として来箱し「ろしあのいろは」というロシア語の学習書を刊行したイワン・マホフによる箱館八幡宮の祭りの様子についてです。「最後には二階建ての大きな山車があって、一階には楽士たち、二階には踊り手たちがいて観衆の注文に応じて踊っていた。」八幡宮の祭礼はフランスの新聞「イラストラシオン」などにも紹介されています。最後は領事館付の海軍軍医アルブレヒトの報告です。「庶民たちは、外国人との交際から受ける利益や彼らの愛想のよい態度のために、外国人に対して日本の役人のような馬鹿げた偏見は抱いていない。逆にわれわれに対していつも好意的な笑顔をみせる。」国際交流の原点はやはり草の根の笑顔なのでしょうか。

函館に最初に外国人が居住したのは、安政4年のアメリカ人ライスで、当時大町にあった浄玄寺境内に止宿しました。安政5年日米修好通商条約が締結された後でも居留地の設定はみられず、商人所有の家屋や蔵などが貸与され雑居の形をとりました。

ロシア領事との間には領事館建設についての交渉が持たれ、箱館奉行は願い出の大工町の原野について御役所や市中に支障がないのでこれを認め、引き続き各国へも割渡すことも差しつかえないとの判断を示しました。



万延元年に箱館奉行から老中へ、大町海岸を埋立し貸渡地に造成することを上申し、翌年の文久元年には各国へ土地を貸し渡すことにしました。大町の居留地埋立以降も居留外国人は増え、大町以外の船着きの便利な海岸地を望む者が多くなりました。このため箱館奉行は、地元商人が埋立てた土地を上地させ外国人に貸渡すことにしました。しかし、当地に対して外国人の反応が良くなく、一部の外国人が借受けただけでその他の土地は再び市中の者へ譲渡される結果となりました。大町埋立地は、居留外国人だけの空間として箱館地所規則の調印により、一応の居留地と認知されました。次の居留地として地蔵町の埋立地を居留地にするべく造成を行い、慶応3年に完成します。

各国の領事館は、ロシアは現在のハリストス正教会地辺りに、イギリスはその隣の現在の遺愛幼稚園地辺りに、フランスは現在の元町カトリック教会地辺りに建設されます。アメリカは資金不足等により領事館建設を断念します。

箱館奉行所は、安政6年6月5日から「外国人交易」を許可するという触書を出しロシア、フランス、イギリス、オランダ、アメリカの5カ国との交易は「商人共勝手ニ可レ致ニ商売一」とし、「居留之外国人共」も店売の品物を買取るのも「勝手次第」であると、自由貿易の原則も触書で示しました。

貿易で扱われる商品の厳重な点検が規定され、北海道の産物の輸出を問屋制、沖之口制の規制のもとにおく、特に煎海鼠、干鮑などは奉行所で直接扱う取引以外はみとめないとなりました。

また他領の商人は箱館での貿易に参加できず、他領の産物もすべて箱館の商人が取扱うように規定されました。自由貿易がたてまえでしたが、もともと国内の流通について規制の厳しかった蝦夷地産物の扱い方がそのまま外国貿易にも適用されました。

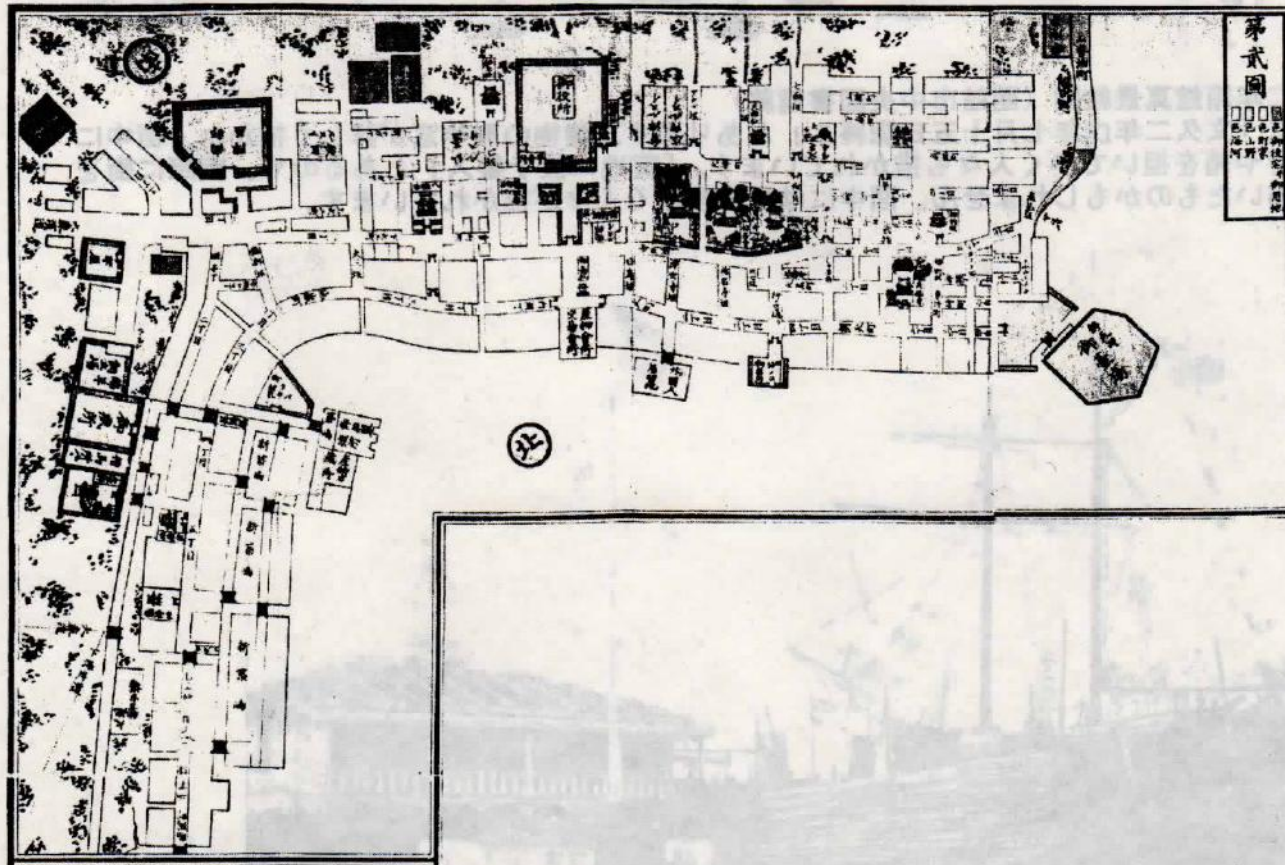
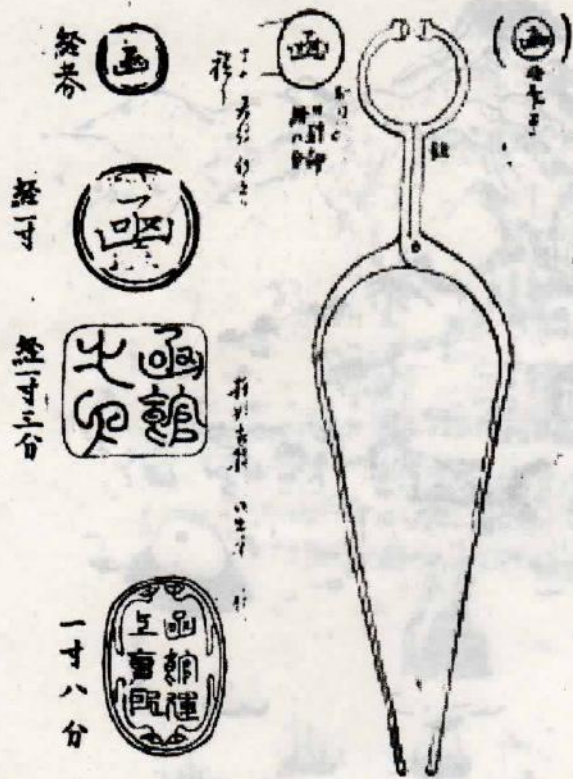
安政6年の貿易開始頃の商人はイギリスのデント商会やリンゼー商会などの代理人や支配人が取り扱っていました。取り扱う商品は昆布・煎海鼠・干鮑・錫などの中国向け海産物が多くを占めていました。慶応から明治初年にかけて、その担い手の主体は清国商人へと移行していきました。函館での清国人の動きを見ると安政6年8月にはアストンが箱館奉行に住居・倉庫の借受けの申請をし、そのなかで「召使支那人五人」という表現に見られるように来函に際して清国人を使用人として連れてきています。アストンのみならず開港期の史料にはポーターやデュースらも同様でした。清商が外国商船に乗船して函館に昆布などの買い付けに来たことは開港当初にも見られましたが、函館に居留して本格的な海産物貿易を行うようになったのは慶応期に入ってからです。



「洋夷茗話 附図」(函館市中央図書館蔵)

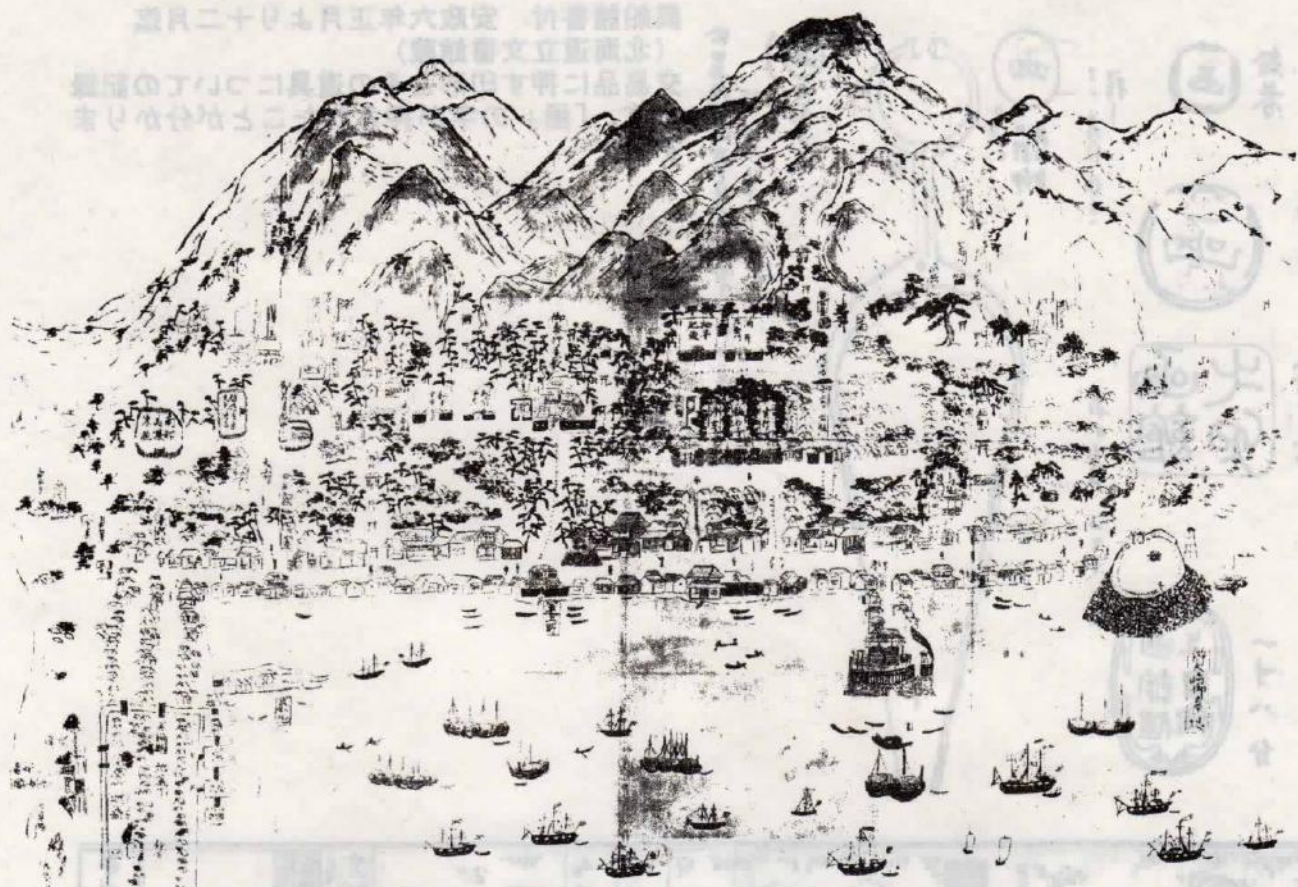
弘前の画人平尾魯僊は藩用で来箱し、『松前紀行』『箱館夷人談』『洋夷茗話』などを著わしています。

異船諸書付 安政六年正月より十二月迄  
 (北海道立文書館蔵)  
 交易品に押す印形とその道具についての記録  
 です。「函」の字が押されたことが分かります。



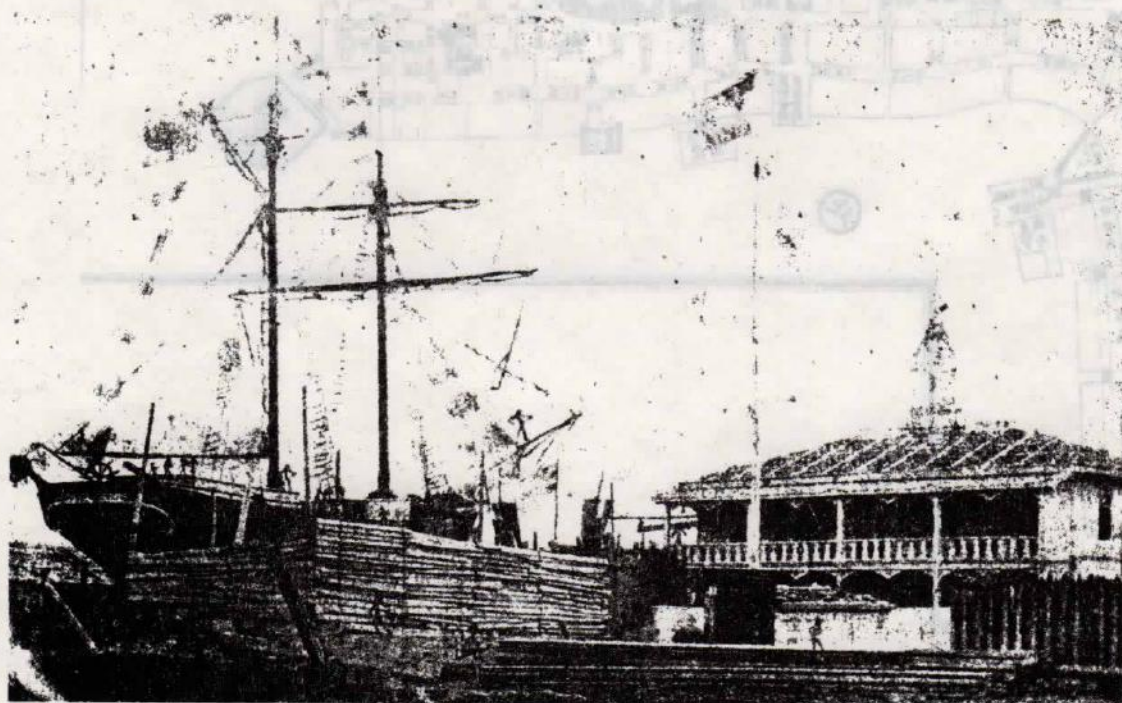
官許箱館全図 (函館市中央図書館蔵)

「官許」とあることから、奉行所認可の木版印刷の箱館の図です。街割りが詳細に書かれ、道路や建物の配置がよく分かります。築島周辺は海に突き出ているように描かれていましたがだいたい埋立が進んでいる様子が分かります。大町の外国人居留地もはっきりと描かれています。



文久二年箱館真景絵図（函館市中央図書館蔵）

図中に「文久二年戊年七月十五日認終ル」とあります。建物の形や窓が詳しく描かれ、街中には天秤や箱を担いで歩く人々も描かれています。「実地ニ於テ書ス」とあるので、実際に街を見て描いたものかもしれません。図中には街中を歩く人々が描かれています。



トムソン造船所（市立函館博物館蔵）

イギリス領事館に勤務していたトムソンは慶応年間に独立して豊川町に造船所を設立しました。

#### 4. 開港場から近代都市へ

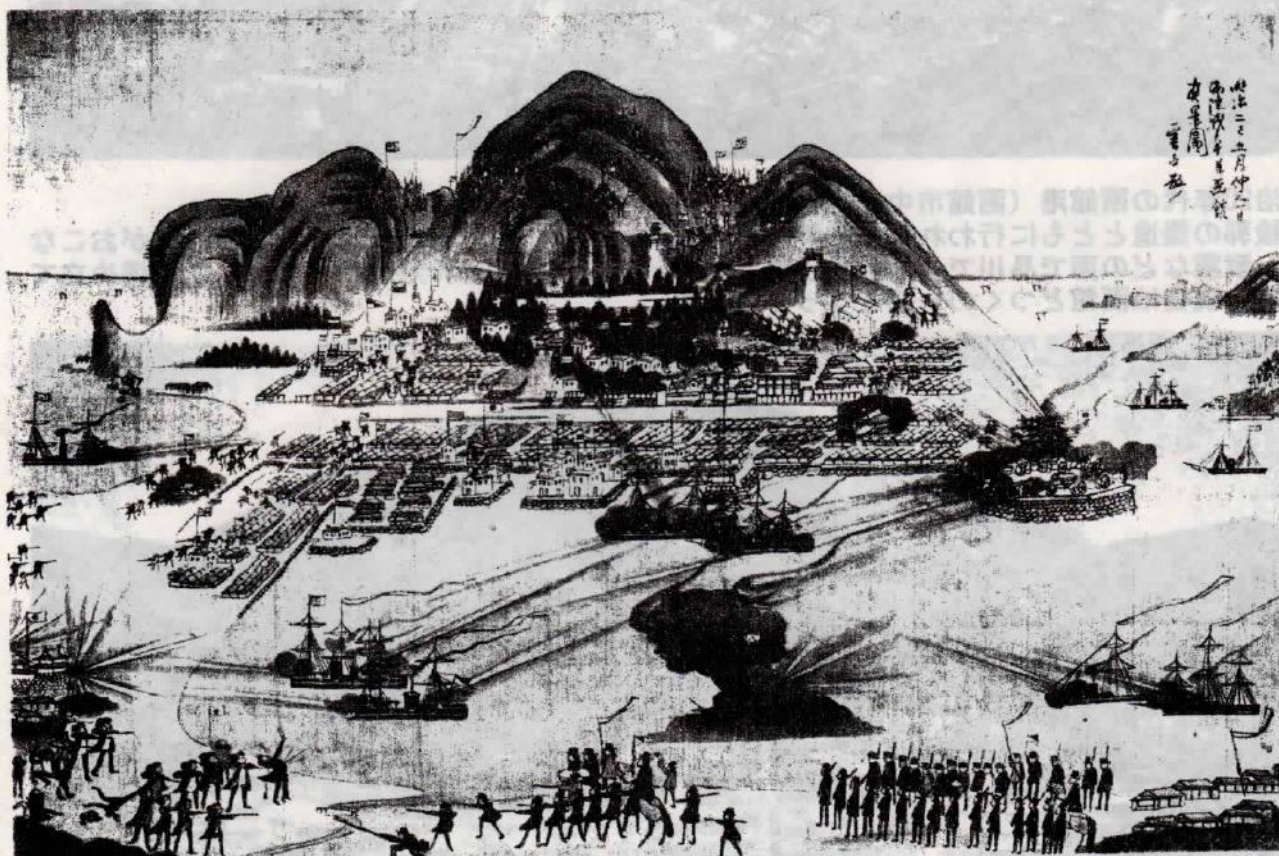
江戸幕府が崩壊し、時代は明治へと動き出しました。この流れは函館においても例外ではなく、箱館奉行所から箱館裁判所の管轄するところとなりました。しかし、戊辰戦争がおり、その戦火は函館にもおよび、明治元年10月から翌年5月まで函館は旧幕府脱走軍の占領下となりました。そしてこの戦争によりまちは大きな被害を受け、函館の明治の出発はまちの復興からはじまることとなります。

開拓使が設置され、明治政府による蝦夷地開拓がはじまります。短期間ではありますが、その拠点は函館にありました。札幌が政治的中心地となったのちも、函館は市民の活力を背景に近代都市へと成長していきます。

函館は昭和10年頃まで東京から北では最大の人口を有する都市でした。函館の近代都市としての確立は明治末期といわれています。

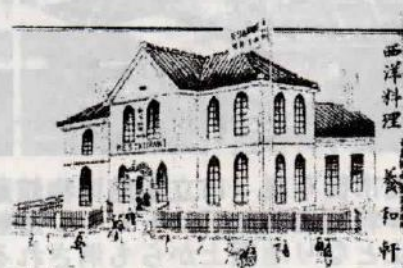
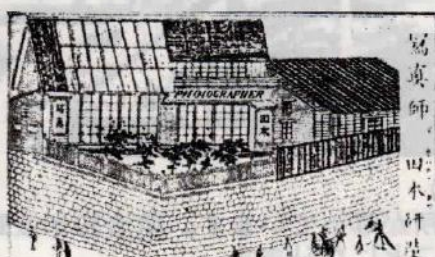
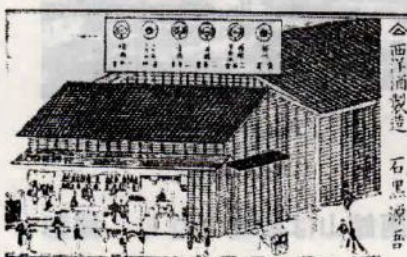
近代都市に向けてそのきっかけとなったのは開港と思われれます。大規模な都市基盤整備が行われたのは、明治11・12年の大火後でした。道路の拡幅、寺社の移転などが行われ、雑然とした街並みが整備され現在の西部地区（箱館山麓）の原型が形づくられました。この後も函館の都市形成には大火はきいてもきれいな関係となっていきます。

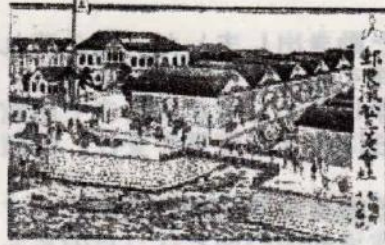
日露戦争後は、露領漁業（北洋漁業）の基地という地位を確立し、大正・昭和初期の経済発展に結びつきました。



箱館戦争図（市立函館博物館蔵）

明治2年5月11日の新政府軍による箱館総攻撃の様子が描かれています。大町の居留地が描かれていて外国の旗が掲げられています。開港にあたって日本の船に付けることになった日の丸が掲げられているのは旧幕府脱走軍側の旗です。





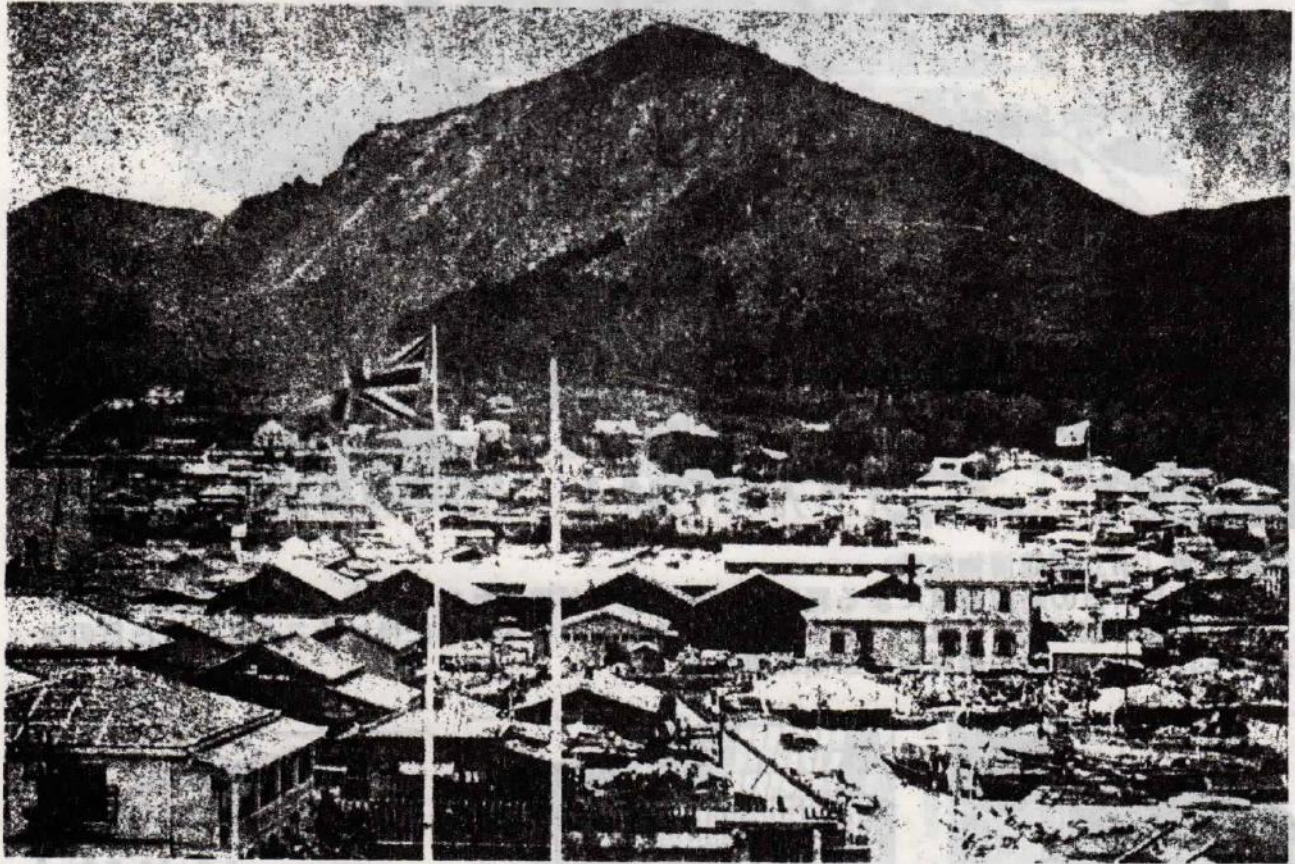
北海道独案内商工函館の魁（函館市中央図書館蔵）

明治18年に発行されたもので、街の有名どころの商店などを建物のイラストを入れて紹介したものです。和風な建物や洋風な建物、レンガを使用した建物などもあります。



明治20年代の函館港（函館市中央図書館蔵）

五稜郭の築造とともに行われた弁天岬台場の工事は、品川の台場工事も担当した石工がおこない、耐震などの面で品川での経験を反映させています。明治29年港湾改良工事により埋め立てられ、現在は函館どつくの一部分となっています。



函館市街写真（市立函館博物館蔵）

西洋料理店養和軒やトムソン造船所が写っています。明治30年以降函館山は要塞となり、撮影禁止となり地図上からも消されることとなります。



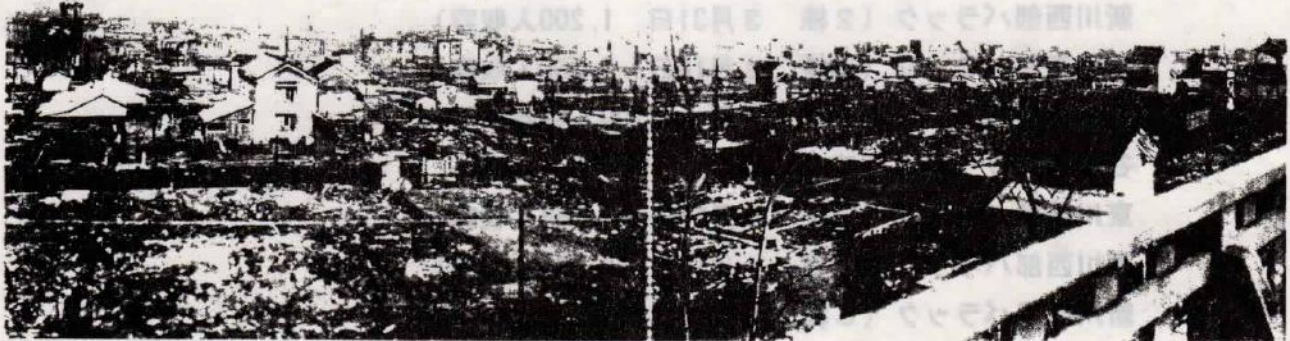
函館市街写真（市立函館博物館蔵）

明治22年頃の函館のメインストリートが写されています。明治30年にはこの通りに馬車鉄道が走り、大正2年には電車が走り始めます。

#### 5. 昭和9年函館大火と港まつり

昭和9年3月21日、函館は未曾有の大火に見舞われました。焼失戸数約2万4千戸、死亡者数2166名、焼失面積約416万㎡。この大火も含めて明治以降百戸以上焼失した火事は26回、そのうち千戸以上焼失の火事は10回、1万戸以上は2回あります。大火に見舞われるたびに街は大きく変化しました。明治11・12年の大火では西部地区の街並みが一変しました。現在の弥生小学校周辺にあった浄玄寺・称名寺・実行寺・高龍寺が移転、八幡坂の上にあった函館八幡宮も移転しました。道路も碁盤の目状に拡幅整備され、旧金森洋物店などの不燃質の建物がつくられました。大正10年の大火後には末広・宝来町にコンクリート造の建物が増えました。昭和9年の大火後は道路の拡幅が進み、東部・北部方面への人口移動がありました。

昭和10年7月1日から3日間、前年の大火の復興記念と貿易開港から77年を迎えることから「第1回港まつり」が開催されました。大勢の市民が参加するパレードが行われ、電飾などで飾られた「花電車」が走り、港では花火大会が催される華やかなものでした。



昭和9年函館大火絵はがき（市立函館博物館蔵）

昭和9年3月21日に発生した火災により当時の街の3分の1が焼失しました。焼失戸数約24000戸、死者2166名。



函館大火絵はがき（市立函館博物館蔵）

左は松風小学校に避難した市民。右は焼け跡で捜し物をスル様子。

### 昭和9年函館大火の概要

発生年月日	昭和9(1934)年3月21日
発生時間	午後6時53分
発生場所	住吉町91番地の民家（現在の住吉町17番地付近）
出火原因	家屋2階の屋根がとばされ、中で使用していた切抜炉（いろり）の残火
最大風速	南南西風速24.2m（午後7時20分）（風速計破損による測定不能） 瞬間最大風速推定40m
被災町数	全焼22町 一部焼失19町（全町数85）
焼失面積	4,163,967㎡（市街地面積15,213,712㎡）
被災者数	102,001人（人口216,900人）
死亡者数	2,166人（焼死748人 溺死917人 凍死217人 窒息死143人 その他29人 大火後の病死112人）（身元不明638人）
焼失戸数	24,186戸
倒木被害	4,130本（函館山付近）
交通被害	電車48両 バス7台 トラック12台 ハイヤー10台 自転車3,305台 馬車322台
橋梁被害	大森橋 隆盛橋 新川橋
収容施設	千歳バラック（6棟 3月31日 1,349人収容） 新川西部バラック（2棟 3月31日 1,200人収容） 新川東部バラック（10棟 4月10日 3,260人収容） 西浜バラック（9棟 4月4日 2,700人収容） 谷地頭バラック（10棟 4月7日 2,770人収容） 東川東部バラック（12棟 4月15日 3,763人収容） 東川西部バラック（19棟 4月15日 1,460人収容） 新川西部バラック（8棟 4月19日 532人収容） 計76棟（1棟の面積105坪） 17,034人収容
診療者数	3月22日～31日 34,020人 4月1日～15日 31,616人

函館大火略年表

出火年月日	出火場所（現町名）	焼失戸数
明治 2 (1869) 5・11	弁天岬台場	872
4 (1871) 9・12	常盤町（入舟・船見町）	1123
6 (1873) 3・23	豊川町	1314
8 (1875) 4・18	蓮葉町（宝来町）	434
11 (1878) 11・16	鱧澗町（入舟町）	954
12 (1879) 12・6	堀江町（末広町）	2326
18 (1885) 5・13	恵比須町（末広・宝来・豊川町）	132
20 (1887) 5・2	西川町（東川・豊川・大手・栄・旭町）	482
28 (1895) 11・3	鶴岡町（大手・若松町）	228
11・28	西川町	117
29 (1896) 8・26	弁天町	2280
32 (1899) 9・15	豊川町	2494
33 (1900) 11・3	東川町	155
34 (1901) 4・11	若松町	225
35 (1902) 5・4	東川町	108
6・10	鶴岡町	396
40 (1907) 8・25	東川町	12390
44 (1911) 3・23	海岸町	140
45 (1912) 4・12	音羽町（大手・若松町）	733
大正 2 (1913) 5・4	若松町	1532
5・25	東雲町	277
3 (1914) 4・8	蓮葉町	849
12・1	鱧澗町	672
5 (1916) 8・2	旭町	1763
10 (1921) 4・14	東川町	2141
昭和 9 (1934) 3・21	住吉町	24186

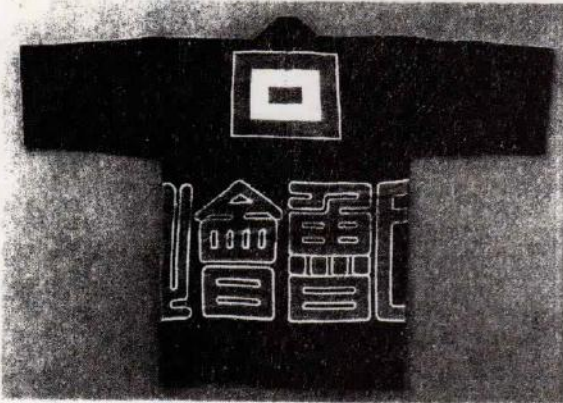
出典：『函館大火災害史』





第1回港まつり絵はがき（市立函館博物館蔵）

前年の大火からの復興と開港77周年を記念して昭和10年7月に開催され、現在も行われている行事です。未曾有の火事からのいち早い復興を印象づけるものでした。



アルバム（市立函館博物館蔵）

日魯漁業株式会社がまとめた北洋漁業に関する写真帳です。母船式鮭鱒漁業の様子が写されています。北洋漁業の基地として函館には母船や独航船が集まり、全国から北洋漁業に従事する人が集まりました。

日魯漁業株式会社の半纏（市立函館博物館蔵）

人口10万人以上都市数および上位20位都市・人口

	大正9(1920)年		大正14(1925)年		昭和5(1930)年		昭和10(1935)年		昭和15(1940)年	
	都市名	人口	都市名	人口	都市名	人口	都市名	人口	都市名	人口
1	東京市	2,173,162 <sup>△</sup>	大阪市	2,114,809 <sup>△</sup>	大阪市	2,453,596 <sup>△</sup>	東京都	5,875,667 <sup>△</sup>	東京都	6,776,604 <sup>△</sup>
2	大阪市	1,252,972	東京市	1,995,303	東京市	2,070,529	大阪市	2,999,874	大阪市	3,252,340
3	神戸市	608,628	名古屋市	768,560	名古屋市	907,402	名古屋市	1,092,816	名古屋市	1,328,084
4	京都市	591,305	京都市	679,976	神戸市	767,596	京都市	1,080,593	京都市	1,089,726
5	名古屋市	429,990	神戸市	644,212	京都市	765,142	神戸市	912,179	横浜市	968,091
6	横浜市	422,942	横浜市	405,888	横浜市	620,296	横浜市	704,290	神戸市	967,234
7	長崎市	176,554	広島市	195,731	広島市	270,365	広島市	310,118	広島市	343,968
8	広島市	160,504	長崎市	189,071	福岡市	228,290	福岡市	291,158	福岡市	306,763
9	函館区	144,740	函館市	163,972	長崎市	204,179	呉市	231,333	川崎市	300,777
10	呉市	130,354	金沢市	147,420	函館市	197,252	仙台市	219,547	八幡市	261,309
11	金沢市	129,320	熊本市	147,174	呉市	190,265	長崎市	211,702	長崎市	252,630
12	仙台市	118,978	福岡市	146,005	仙台市	190,177	八幡市	208,629	呉市	238,195
13	小樽区	108,113	札幌市	145,060	札幌市	168,575	函館市	207,480	仙台市	223,630
14	札幌区	102,571	仙台市	142,895	八幡市	168,218	静岡市	200,737	静岡市	212,198
15	鹿児島市	102,396	呉市	139,380	熊本市	164,449	札幌市	196,541	札幌市	206,103
16	八幡市	100,227	小樽市	134,470	金沢市	157,309	熊本市	187,382	佐世保市	205,989
17			鹿児島市	124,734	小樽市	144,884	横須賀市	182,871	函館市	203,862
18			岡山市	124,521	岡山市	139,221	鹿児島市	181,736	下関市	196,022
19			八幡市	118,378	鹿児島市	137,232	和歌山市	179,732	和歌山市	195,203
20			新潟市	108,941	静岡市	136,481	佐世保市	173,283	熊本市	194,139
10万人以上の都市数	16		22		28		34		45	

「第1回国勢調査概況」(函館区役所)・「大正14年国勢調査概況」・「昭和5年国勢調査概況」(函館市役所)・「昭和10年国勢調査報告」・「昭和15年国勢調査報告」(総理府統計局)

『函館都市の記憶』(函館市史編さん室編)

## 関連年表

- 寛政4(1792) ロシア船エカテリーナ号がネモロに來航 翌年箱館に來航
- 享和2(1802) 箱館奉行を設置 東蝦夷地を永久上知
- 享和3(1803) 箱館奉行所が開設
- 文化4(1807) 松前藩が陸奥梁川に転封され、全蝦夷地が幕府直轄地となる
- 文化10(1813) ロシア船ディアナ号が箱館入港 高田屋嘉兵衛、ゴロウニンの釈放
- 文政4(1821) 松前藩蝦夷地に復領
- 安政1(1854) 米・英・露と和親条約締結(蘭は翌年)  
ペリー艦隊箱館に來航 プチャーチンも箱館來航 箱館奉行が再設置される
- 安政2(1855) 避難港として箱館開港 松前藩領を除く全蝦夷地が幕領となる
- 安政3(1856) 弁天岬台場築造着工
- 安政4(1857) 五稜郭築造着工 アメリカ領事ライス箱館着任(浄玄寺止宿)
- 安政5(1858) 米・露・仏・英・蘭と通商条約締結 ロシア領事ゴシケヴィッチ箱館着任(実行寺止宿) 大老井伊直弼による尊皇攘夷派弾圧(安政の大獄)
- 安政6(1859) 横浜・長崎・箱館において米・露・仏・英・蘭との通商開始(神戸は1867年、新潟は69年開港) イギリス領事ホジソン箱館着任(フランス領事兼任 称名寺止宿) 蝦夷地を会津・仙台・秋田・庄内・津軽・南部藩に分領する
- 万延1(1860) 大町居留地竣工 ロシア領事館完成 井伊直弼の暗殺(桜田門外の変)
- 文久3(1863) イギリス領事館完成
- 元治1(1864) 五稜郭内箱館奉行所開庁 弁天岬台場竣工
- 慶応3(1867) 地蔵町居留地竣工
- 明治1(1868) 箱館戦争が起きる
- 明治2(1869) 箱館戦争終結 開拓使が設置される
- 明治15(1882) 開拓使が廃止される
- 明治16(1883) アメリカ領事館閉鎖
- 明治29(1896) 弁天岬台場が埋め立てられる
- 明治37(1904) アメリカ領事館再開(キング邸を使用 大正8年閉鎖)
- 明治41(1908) ロシア領事館現在地に再建(昭和19年ソ連領事館として閉鎖) 青函航路が国鉄直営となる
- 大正2(1913) イギリス領事館現在地に再建(昭和9年閉鎖)
- 大正3(1914) 母船式鮭鱒漁業が行われる